

四季講堂（元三大師堂）（重文）

良源（りょうげん 912－985）の住坊であった定心房がこのお堂の起源である。

弥勒菩薩が本尊であったが、康保四年（967）、良源 54 歳の時に、村上天皇の勅命で春夏秋冬の四季に学徒を集めて大乘經典の講經と論議の場とすることが定められ、以後、恒例となり四季講堂と呼ばれるようになった。

良源は 55 歳で第 18 代天台座主となり、在位 19 年の間に、争乱や天災などで荒廃した山上の堂塔伽藍を整備した。僧風の刷新も行ない、広学豎義の論議を創始して学問の興隆をはかった。

横川地区は源信をはじめ優れた門弟を多数輩出し、僧の数も三千人を超え、東塔地区、西塔地区にならぶ勢力へと成長した。良源はその死後、元三大師の尊称を与えられた。験力に優れたと伝えられ様々な伝承が生れており、如意輪観音や不動明王の化身としても信仰されている。「おみくじ」の創始者としても知られている。良源が鏡に映った姿を見ると鬼の姿であったという故事にならった、角大師のお姿の護符は魔よけとして今でも請い受ける人が多い。

良源は 985 年の正月に死去したため、「元三大師」の尊称を与えられた。これは「正月三日に没した大師」の意味である。このお堂には良源の真像が祀られ、全国の元三大師信仰の中心拠点として発展した。現在も、良源入滅の正月三日の元三会では法華經の講經論議が、九月三日の誕生会では如意輪曼荼羅供が行われている。四季にはそれぞれ法華八講の講經法要が行われる。また、院内寺院では住職が良源をしのんで修法や論議を毎日行うお勤めがあり、その厳しさから「看經地獄」（かんきんじごく）と呼ばれ、「回峰地獄」「掃除地獄」と並ぶ叡山三大地獄の一つとなっている。